BCS
PRIZE-WINNING WORKS
BCS賞受賞作品探訪記
26

第三五回受賞作品（一九九四年）

宮崎県立芸術劇場 前編

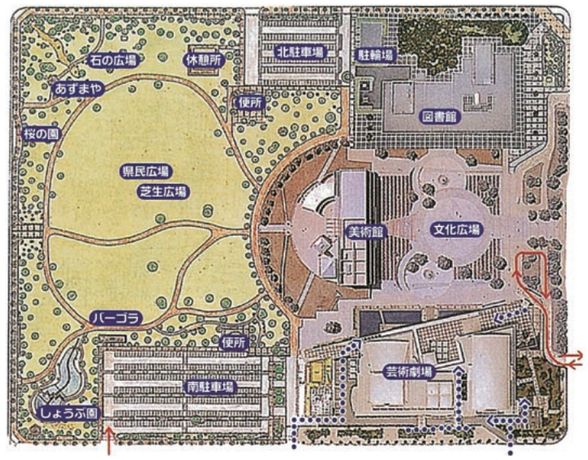
宮崎県の文化拠点として計画された宮崎県総合文化公園。約一六・六ヘクタールの広い公園の中に、一九九三（平成五）年十一月、コンサート、演劇、イベント用の三つのホールを備える県立芸術劇場がオープンした。前編では芸術劇場が計画された経緯と、そこに託された想いなどを紹介する。

大学跡地に計画された文化の一大拠点

JR宮崎駅から車で一〇分ほど北上すると、樹木に囲まれ、芝生がゆったりと広がる「宮崎県総合文化公園」が姿を現す。東西四五〇メートル、南北三七〇メートルに及ぶ広大な公園の東側半分は文化施設が建っているゾーンである。中央にあるなだらかな丘のような文化広場を囲むように、図書館、美術館、芸術劇場が配置されている。西側半分は芝生と樹木が茂る県民広場が広がっており、学校の放課後や休日ともなれば子供たちが遊びまわっている。若者から高齢者まで、多くの人がのんびりと散歩する姿が見られ、市民の暮らしにすっかり根付いた場所になっていることが感じられる。

じつはこの公園は三〇年前まで、国立宮崎大学農学部のキャンパスだった。学部ごとに分散していたキャンパスを市南部の木花地区に移転・統合し、合わせて住宅地を開発して「宮崎学園都市」がつくられた。それに並行して農学部跡地を県が取得。一九八三年五月に、置県一〇〇周年記念事業として跡地に県の一大文化拠点を築くという「宮崎県総合文化公園基本構想」が当時の松形祐堯知事から発表された。

県の土木部営繕課に在籍していた中山道生氏が振り返る。「ホールの基本構想の中に、文化の中核を担う三つの施設として図書館、美術館、ホールが位置付けられました」。ホールが現在の県立芸術劇場（愛称・メディキット県民文化センター）である。「当時、県には博物館（五〇ページ地図参照）の西側に県民文化ホールがありましたが、席数が五〇〇席と規模も小さく、十分に機能する県立ホールがありませんでした。文化的な水準を向上させるためにホールの建設は強く求められていました。一九八八年から一九八九（平成元）年にかけて、さまざまな市民団体や専門家の意見を聞きながら、県民が本格的な音楽や演劇などの芸術に触れることができ、また文化的な活動ができる施設づくりを目指してホールの基本計画が練られました」。その結果、三つのホールに、練習場などを充実させた本格的な施設をつくることが決まった。三つのホールとは、クラシック音楽の演奏に特化した「コンサートホール」（一、八一八席）、演劇



上／総合文化公園施設平面図。かつては宮崎大学農学部のキャンパスだった。移転後の跡地を活用した。
左／西側の県民広場。市民に親しまれる憩いの場。豊富な樹木は農学部のキャンパスに植えられていたものがそのまま引き継がれ育った。

芸術劇場のコンサートホール側の外観。左手奥にある大階段を上ったところに光のプラザが広がり、そこから3つのホール入場口のあるホワイエに向かう。

上／演劇ホールの客席からステージを見る。約30m以内の距離で、どの席からもステージ上が見えるように設計されている。
下／光のプラザから3つのホールの入口を見る。中央の透明のシャフトはエントランスキューブ。

を基本として各種の音楽や演目に適応する「演劇ホール」（一、一一二席）、さらにステージの構成を多様に変えることができて、席数三〇〇と利用しやすい規模の「イベントホール」である。建築設計者の選定はプロポーザル方式で行われ、ホールの設計に国内最多の実績を持つ㈱佐藤総合計画、㈱毛利前田建築設計事務所のJVが選ばれた。また、施工は入札によって飛島・フジタ・志多・吉原特定建設工事JVが行うことになった。

ホールと公園が一体となるプレジャーガーデンの提案

二五年前に建築設計を担当した佐藤総合計画の大野勝氏は、この場所を初めて訪れたとき、とっさに現在の芸術劇場の建築の原型が頭に浮かんだと語る。「公園と建物のあり方として、十八世紀頃の英国に起源を持つプレジャーガーデンという考え方があります。それをコンセプトとして、建物が自然豊かな公園の一部であり、同時に建物自体も公園のようにあちこちに楽しみの場を持ち、さまざまな方向から人々が行き来できるような提案をしたいと思いました」。周辺環境に恵まれ、敷地面積は約二八、六〇〇平方メートルとゆとりのある

なかで、三つの独立したホールを素直に並列する平面構成がとられた。

東側からホールに近づくと、大階段が軽やかに空に向かって開かれ、二階まで導かれたところに約三〇メートル四方の広場「光のプラザ」が現れる。このプラザが三つのホールを結びつつ、各ホールへ向かう明快な動線をつくりだしている。さらにホールの南側へ抜けるデッキもプラザにつながり、建物全体を回遊できるように計画されている。また、公園に向かって開かれた北側には廻廊がめぐらされ、立ち寄った人たちが、軒下のベンチでくつろいでいる様子はいかにも気持ちよさそうだ。音楽や演劇などの文化を楽しむ場が、豊かな公園と一体化した姿にあらためて気づかされる。

明るく落ち着いたグレーの外観には花崗岩や磁器タイル、アルミパネルといった異なる材料が使われており、それぞれの素材感が味わいのある表情をつくりだしている。竣工から二〇年が経ち、その美しさはほとんど変わっていない。当たり前に見えて、そんなところにも芸術劇場が大切に使われ、日常の維持管理に努力が払われていることが感じられる。この建築に迎えられ、初めてコンサートホールの扉を開けたとき、さらに心を奪われる光景が待っていた。

エントランスキューブの内部。エレベーターの回りを螺旋階段が取り巻く。2階の光のプラザと、1階エントランスホールやレストラン、地下1階の練習室などをつなぐ。

建築主より

文化の拠点に学校も加わって宮崎の文教エリアになっています

宮崎県土木部営繕課（当時）
中山道生 *Michio Nakayama*

基本設計まで教育委員会が担当し、実施設計の段階で土木部営繕課が引き継ぐことになり、一九九〇年四月、私を含め四人が担当になりました。当時はバブル経済の最中で、建設費がどんどん高騰し、最初に全体予算を想定しても発注時のコストと合わなくなってしまうのです。そのため、県の財政が苦しい中で、たとえばホールの特殊設備の一部を単年度予算で設置するなど、予算の確保にはだいぶ苦労しました。

また、コンサートホールは音響効果を高めることにもっともこだわりをもっていましたので、仕上げなどによって影響が出ないように施工直前に調整を掛けることもありました。細かい納まりを設計JVの担当者の方がまとめ、施工の方々が懸命に対応された場面もあり、そのおかげで精度の高いホールができあがったのだと思います。今でもよく覚えているのは、竣工前に音響測定に立ち会ったときのことです。ヤマハ音響研究所の方がホールの中を移動して手を叩き、音の反射状況などを測定するのですが、ステージの方では拍子木を打ったんです。そのカーンという澄み切った音がホール中に響き渡り、身体がぶるっと震える感動をおぼえました。

その後、総合文化公園の近辺では、宮崎大学の他の学部の跡地に公立大学や私立大学などがつくられ、現在は一帯が文化と文教の地になってきています。

設計者より

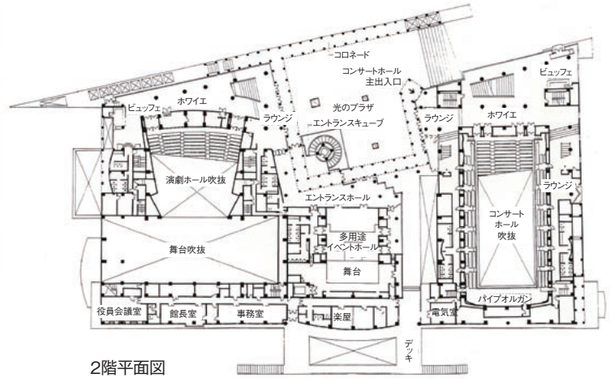
将来を見通した県の企画力で公共の専用ホールが実現しました

株式会社佐藤総合計画
取締役専務執行役員
大野 勝 *Masaru Ono*

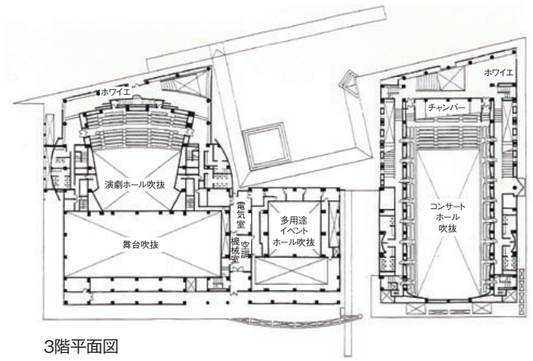
これまでたくさんの建築設計に携わってきましたが、宮崎県立芸術劇場は県とわれわれ設計者、そして施工者が密接に連携がとれたすばらしい経験でした。とりわけ、県の企画力の確かさが印象深く残っています。

当時は、ホールのあり方について多くの議論が出始めた時期でした。多目的ホールといいながら、実際には中途半端な無目的ホールになっているという声もあがっていましたが、多くの意見を調整し、かつ前例を踏襲しがちな自治体の公共ホールは、音楽や演劇に重点を置きつつも、やはりいろいろな用途に対応する「多目的ホール」をメインとするケースが大半でした。そのなかで宮崎県は県民のための施設として、ホールの純化を選択し、クラシック音楽専用ホールをつくるという方針を最後まで貫かれました。プロジェクトに参加したのは設計段階からですが、県の基本方針のもと、クラシック専用ホールの音響特性に強く影響する建築的課題を徹底的に詰めました。形状をシューボックスにしたり、席数を当初の二、〇〇〇席から減らしたり、地元産材を無垢に近い状態で使用することも、こうした完璧さを求めたからです。

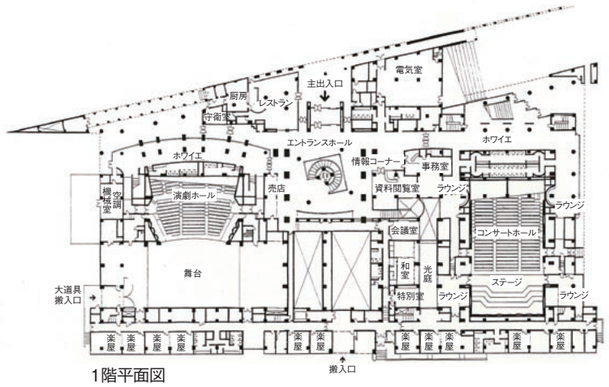
その後、国際的な音楽家が集まってきて、音響はもとより、建築的にもホールが評価され、県民の方に親しまれる場所になっているとうかがい、嬉しい限りです。



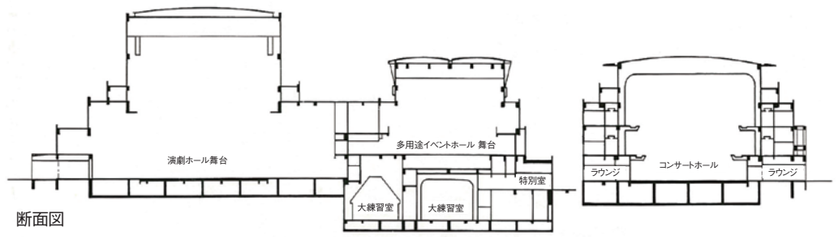
2階平面図



3階平面図



1階平面図



断面図

宮崎県立芸術劇場（現・メディキット県民文化センター）

JR宮崎駅より　タクシーで約10分
宮崎交通バス：「文化公園」下車、徒歩約1分／「宮崎神宮」下車、徒歩5分／
「文化公園前」下車、徒歩1分／「霧島3丁目」下車、徒歩4分

計画概要

所 在 地：宮崎市船塚3丁目210番地
建 築 主：宮崎県
設 計 者：株式会社佐藤総合計画、株式会社毛利前田建築設計事務所
施 工 者：飛島建設株式会社、株式会社フジタ、株式会社志多組、吉原建設株式会社
竣　　工：1993年5月
敷地面積：28,559.04㎡
建築面積：10,330.39㎡
延床面積：21,990.57㎡
構　　造：鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
規　　模：地下1階、地上4階、塔屋1階